

自由の女神像

近藤節夫

これほど値打ちに違いがあり、真偽において物議を醸すお騒がせの世界遺産も珍しい。下は下町界隈の飾り物から、上はニューヨーク・リバティ島にある元祖・自由の女神像まで実に多種多様である。日本国内にもニューヨークと同じ緯度、北緯 40° 40′ にあるというだけの理由で、「ふるさと創生資金」を投入し緯度に拘り実物の四分の一規模に建てられた青森県おいらせ町の自由の女神像、そして東京・お台場に置かれたフランス政府公認の「台場の女神像」がある。

この自由の女神像の原語名は「Statue of Liberty」(自由の像)で、どこにも「女神」という言葉は記されていない。正式名は「Liberty Enlightening the World」(世界を照らす自由)と呼ばれている。優しい女性像に対する日本人独特のこだわりから「女神」が付け加えられたようだが、この「女神」は日本人が想像するような優しい女性とは程遠く、むしろ逞しい女性像なのである。ちょうどルーヴル美術館に展示されているドラクロワの「民衆を率いる自由の女神」の女性のようにその志は気高く神々しい。右手には純金で作られた炎を擁するトーチを空高く掲げ、左手には独立記念日を刻印したアメリカ合衆国独立宣言書の銘板を抱え持っている。更に足元には引きちぎられた鎖と足かせがあって、何と女性はこれを踏みつけているのである。あらゆる弾圧と抑圧からの解放と、人類が自由で平等であることを強く主張している、聞きしに勝る強い女性なのである。

この自由の女神像は自由と民主主義の象徴として、アメリカ独立 100 周年記念にフランスから贈られたものであることは広く知られている。マンハッタンの最南端バッテリー・パークから対岸のスタテン島へ頻りにフェリーが運航されており、その途中でリバティ島へも立ち寄ってくれる。だが、2001 年のニューヨーク 9.11 テロ事件勃発以降テロ警戒上の理由により女神像内部への立ち入りが許可されなくなってしまった。せっかく目の前に 10 階建てのビルに匹敵する巨大な世界遺産の女神像を見ながら、今は写真撮影だけで我慢しなければならない。

この女神像の内部構造については誰も興味を抱きがちであるが、筆者には苦い経験がある。この女神像内部は外観の優雅さとは似ても似つかぬ荒々しさと鉄パイプのジャングルなのである。エレベーターに乗って首の辺りで降り、後は展望台である頭頂部の王冠へ鉄製のハシゴをよじ昇る。このハシゴが意外にも曲者で、一步一步の歩幅が日本人には大き過ぎて辿り着いた時には、両腿部がつってしまって暫く歩

けなかった経験がある。見学者を戸惑わせる不思議な世界遺産である。それでも王冠の窓から見た 40 年近く前のマンハッタンの摩天楼街は今も目に強く焼きついている。